

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉（3）

坂 本 清 音 監訳
 小 島 紀 子
 杉 野 マ リ 子
 秋 山 恭 子
 松 波 満 江
 柿 本 真 代
 小 林 弘 美

〈デントン書簡 139〉 【小島紀子 訳】

日本 京都

1890年 5月 5日

拝啓 クラーク博士

届いたばかりのご親切なお手紙に心から感謝申し上げますと共に、私が、手紙を書くことを怠っていたことをお詫びいたします。私は宣教師書簡というものについて不安に思っています。その多くが宣教師新聞に掲載されますし、人はよく考えもしないで書簡を回覧してしまうからです。その上、あなた様のお時間は非常に貴重なのですから、私のつまらない手紙を読むことで費やされてはなりません。

私はハリス氏¹に、お贈り下さった寄付金が私たちにもたらした大きな特権のお礼を申し上げたい気持ちで一杯なのです。どうか同封の手紙にお目通しの上、ハリス氏にお送りいただけないでしょうか。そうすれば私の仕事の

一端がお分かり頂けると思います。おそらくこの仕事全体の面白さは私にし
か分からないでしょう。もし私の活発な植物学のクラスを見て、私の生理
学のクラスの暗誦をお聞き下さったら、なぜ今の仕事に幸せを感じているか
がお分かりいただけるでしょう。私は最善を尽くしてホワイト校長²を助け
ようとしていますが、この方面での私の経験不足のせいで、あまり役に立っ
ていません。リチャーズさん³やホワイト校長のような新人宣教師を責任あ
る地位につけるのは大きな間違いですし、二人がこの点で犠牲になっておら
れることがとても悲しいです。周りの宣教師の方たちの多くは私が義務を逃
れていると思っているでしょうが、仕事の持つ真の価値を慮るあまりに、こ
の独特の文化を持つ国民⁴のことを十分に知るまでは、自ら責任を引き受け
るのは待とうという気持ちになるのです。

リチャーズさんからの最近の手紙⁵は私を非常に落胆させる内容で、帰国
されるべきだと思います。冬までも日本に留まれる状態でないことは確かで
す。

ギューリック家⁶の人たちが、私の従兄弟でバーモント州ミドルベリーに
いるエドワード・パーカー博士⁷を、彼らのステーション [熊本ステーション]
に迎えようとしています。数年前、博士はあなた様との間で何回か日本の
ことで手紙のやりとりをされましたが、あなた様は彼の来日をお勧めにな
りませんでした。パーカー夫妻とローランド夫妻⁸は友人同士でしたので、
一緒にいることを望んでいました。パーカー夫人が亡くなったことと、ボー
ドがパーカー博士の来日を勧めなかったことが、今では彼の決心に幾分重石
となっているのかもしれませんが。こちらではパーカー博士の来日を望んで
いますし、シドニー・ギューリック氏⁹はあなた様が彼に手紙を書いて下さる
だろうと言っています。

さて、コルビーさん¹⁰に関してお願いしたいことがあります。彼女が最初
に帰国計画を立てていた時、ロサンゼルスとパサデナにいる私の友人たちが
訪ねてくれるようにと招待し、彼女も本気でそうするつもりでした。ところ

が、いざ予算を立てる段階になった今、もはやその旅行の余裕はないと考えています。もちろん今からでは遅すぎて、南ルートをとることはできませんから、もしロサンゼルスを訪問するなら、ただサンフランシスコとロスの間を往復するだけになってしまいます。鉄道運賃は約15ドルだと思いますが、大切なコルビーさんのためにボードがご配慮くださることをお願いします。といいますのは、出会った宣教師全員の中でコルビーさんほど自分のことを顧みないで熱心に仕事をする人はいないからです。

ハッチンス夫人¹¹が、話しに来て欲しいとコルビーさんを招待しました。「現地の人々に宣教の仕事への関心呼びますにはコルビーさんが必要だ」と言っています。ハッチンス夫人はコルビーさんがその地に行く頃にはいませんが、当地の教会は今まで以上に教会員の気持ちを鼓舞する必要を感じています。別の友人たちもコルビーさんを招待していますので、彼女がカリフォルニアで夏の多くの時期を過ごすのは賢明なことでないかと思っています。もし太平洋ウーマンズ・ボードがコルビーさんに働いて貰うだけのお金が工面できれば、彼女は素晴らしい働きが出来ると思いますし、同時に彼女が必要としているような休みが（本国の人たちに会うことによって）とれるでしょう。

コルビーさんが、シャトークア集会¹²の間、パシフィック・グローブに滞在してロサンゼルス近郊の海辺で1～2か月過ごすことと、カリフォルニアに着いて最初の数週間はサンノゼに滞在して師範学校での仕事を見学することは可能でしょうか？

カリフォルニア州ロサンゼルス、N. ヒル通り26番地のミス・マーサ・N・ハサウェイ¹³、カリフォルニア州ロサンゼルス、ドウニー通り811番地のミス・ジャネット・M・ヘンダーソン¹⁴、カリフォルニア州パサデナ、カリフォルニア通りのフランク・マーストン夫人¹⁵が、コルビーさんに長期の滞在做して貰えるよう心底から招待をしています。後者の二人は、この春受け取った手紙の中でこの件について書いていました。ハサウェイさんは、ロサ

ンゼルス第一教会の婦人たちの間で、そしてヘンダーソンさんはイーストサイド教会の中で、コルビーさんのことを知って貰う最適の人となるでしょう。もしあなた様がコルビーさんを滞在させる金銭的余裕があるとお考えなら、彼女たちに手紙を書いて下さり、コルビーさんに対するあなたのご計画と、日本での彼女の仕事についてお伝えいただければと願います。彼女は禁酒運動でも大きな働きをした人ですので、W.C.T.U.¹⁶の女性たちも関心を持ってくれることと思います。

ご存じの通り、彼女の離日予定は5月31日です。

手紙が長くなったことをお許しください。そして、私への変わらぬご親切に対し心から御礼申し上げます。

敬具

フローラ・デントン

1. ハリス氏 前出〈138〉
2. ホワイト校長 前出〈C-5〉
3. リチャーズ 前出〈446〉 来日後、日本の生徒のレベルの低さに落胆。同僚 Ida V. Smith ともうまくいかず、学校を辞め伝道活動がしたいとストレスを感じていた。
4. 日本人のこと
5. この手紙が書かれた時期は保養のため上海に滞在中。
6. ギューリック家 1890年当時、熊本ステーションに配属されていたギューリック一族には、アメリカン・ボード宣教師として2番目に来日した Orramel Hinckley Gulick (1830-1923) 夫妻を中心に、Miss Julia Gulick (1845-1936)、Sidney Lewis Gulick (1860-1945) がおり、熊本草葉町教会を中心に活動していた。
7. Parker, Edward 詳細不明
8. Rowland, George Miller (1859-1941) 妻は Helen A. Rowland (1863-?) 1886年、アメリカン・ボード宣教師として夫妻で来日。岡山に4年、その後1890~95年は鳥取、1896年~1924年は札幌ステーションに所属。1925年には、在日アメリカン・ボード代表として東京に赴任した。
9. Gulick, Sydney L. (1860-1945) 1888年来日、熊本ステーションに配属(1888-93)された。その後、大阪(1894-95)、松山(1897-1904)を経て1906年からは同志社で教鞭をとり、1913年帰国まで、科学概論や進化論を講じた。

10. コルビー 前出〈446〉
11. ハッチンス夫人 前出〈448〉 カリフォルニア第一組合教会牧師夫人
12. Chantanqua Assembly シャトクア集会 19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アメリカで大流行した成人教育運動。シャトクアの名前は、第1回の集会が開かれた湖に因んで命名された。
13. Hathaway Martha N. 詳細不明
14. Henderson Janet M. 詳細不明
15. Mrs. Frank Marston 詳細不明
16. W.C.T.U. (Woman's Christian Temperance Union) 南北戦争後、アメリカ中西部の小さな町々で始まった禁酒運動を1874年に組織化したのが W.C.T.U. であり、その同盟を当時最大の女性組織に育て上げたのが、Frances E. C. Willard (1839-1898) であった。社会問題の原因および結果としてアルコール中毒を認識し、その撲滅のために女性たちが結束して始まった運動。その流れを汲むのが日本基督教婦人矯風会であり、矢島楯子が会頭となって全国組織として活動を開始したのが1893年であった。日本では、禁酒禁煙の他に、一夫一婦制、公娼廃止運動にも精力的に取り組んだ。

〈クラーク書簡 C-6〉 【小島紀子 訳】

1890年5月31日

拝啓 デントン様

5月7日付のお葉書を土曜日に受け取り、すぐにアン・ウィリアムスさん¹宛てに口述筆記した書簡を、1部はシカゴの、もう1部はパサデナの住所宛てに送りました。ウィリアムスさんについておっしゃっていることから、正にあなたが必要としている女性に違いないと思いますし、彼女が宣教師になる決意を下さるなら、私にとっても大きな喜びとなります。

ついでですが、宣教活動におけるあなたのご成功に大いに満足している旨を述べさせて下さい。あなたご自身で述べておられるだけでなく、他の宣教師たちの手紙からも、ウィリアムスさんにあなたの素晴らしい成功を保証することができますし、さらにその仕事が、彼女にとっても魅力的なものとなる条件を備えた、最適の仕事だと保証することも出来ます。

こちらから諸外国に派遣する若い女性の成功に関して、私がどれ程心配し

ているかはお分かり頂けないでしょう。大抵はうまく行くのですが、時には環境に順応するのが苦痛となる人、時には落後者となる人もいます。独身女性の立場は、既婚女性の場合よりも、多くの点で苦しいものです。独身女性には家庭生活はありませんし、重要な意味を持つ、母国での家庭生活を成り立たせている家族の交り也没有せん。ただ正真正銘の真面目な目標と、実に様々な状況に自分を合わせる能力とが、通常うまく行く最高手段であり、成功する場合は、結果としてキリストの大義のための善となっていますし、個人の幸せももたらしてくれるのです。

真心を込めて 敬具

N. G. クラーク

1. Anna Williams 詳細不明

〈クラーク書簡 C-7〉 【杉野マリ子 訳】

1890年6月9日

拝啓 デントン様

お葉書の要請にこたえて、ご友人 [アン・ウィリアムスさん] にカリフォルニアとシカゴ宛に手紙を出しましたが、未だ返事は来ておりません。またハリスさんにも手紙を添えてあなたの書簡をお送りしましたところ、心温まる関心を示して下さいました。同封したお手紙が功を奏したのでしょうか。ハリス氏はあなたの報告を大層喜んでおられたので、今後もあなたや京都ステーションの人たちも機会があれば、手紙を出して下さいと思います。ハリス氏は日本に並々ならぬ関心を寄せておられますし、ご自分の膨大な寄付の行く末にも当然興味を持っておられます。そして希望の持てることなら何でもハリスさまの励みになりますし、純粹で熱心なクリスチャンのお心の幸せを増すことになるでしょう。

ご友人が、私たちの招きをはっきり確信をもって受け取って下さるように

願いながら、返事を待つことにします。しかしこれまでも問い合わせをした人に何度もがっかりさせられてきたので、期待はし過ぎないようにします。

敬具

N. G. クラーク

〈デントン書簡 140〉 【秋山恭子 訳】

日本 京都

1890年7月21日

拝啓 クラーク博士

今回の手紙では多くの事柄をお伝えしたいと思います。多分その内容には余り関心をお持ちにならないと思いますので、どうぞお時間に余裕のある時を見計らって読み始めてください。

私には昨年女学校を卒業した19歳の女性、土倉政¹さんという知り合いがいますが、彼女は私にとって、教師であり、教え子であり、そして友人なのです。大変な美人である上に、性格もよく非常に調和のとれた女性で、日本人には珍しく謙虚です。中島博士²が滞米中、留守家族の援助をした土倉氏³の娘です。土倉氏がなぜクリスチャンでないのか私には理解できません。彼は新島氏⁴の親友で、並みのクリスチャン以上にキリスト教の支援者です。お政さんは翌年には渡米したいと願っており、私はそのことをとても気に掛けておりました。

率直に言わせて頂きますと、本国にいるあなた方は日本の少女たちをアメリカに派遣するために送金し、そのうえ滞米中の面倒までも見ますが、これは愚かな行為です。新島氏を除いて——彼はとにかく全てにおいて例外なのですが——これまでアメリカで教育を受けて立派になったと思う日本人に出会ったことはありません。帰国後は自国の人を嫌いになり、日本人として生活することが出来なくなります。日本の食べ物を食べる、日本的なものは全て受け入れることが出来なくなります。それをみると、私はアメリカこ

そが有害だと思うのです。なぜ宣教師が日本に来て大学を設立したり、アメリカに男女の生徒を留学させるのか私には皆目わかりません。ここ日本で、宣教師の任務は「日本のあらゆる場所に出掛けて行って、すべての人に英語を教えなさい」⁵であると了解しておりますし、それは聞こえはよくないが的を射た言い方です。確かに、英語を教えることが私の仕事であり、これからもそうなのですが、そればかりに熱を入れるのは行きすぎであり、残念なことです。一方、日本にあるクリスチャン・スクールがこの国をキリスト教化する重要な要因であることは明らかですが、それも行き過ぎると過ちを犯すことになります。日本人は独自の高等教育システムを構築する能力を十分に持っていますので、任せておけば自分たちですらでしょう。

土倉さんは私費で留学します。アメリカからの援助金は全く当てにしています。フィラデルフィアのモリス夫妻⁶の日本でのお働きについてはよくご存じだと思いますが、自分たちの帰国に併せてお政さんを同行したいと申し出ていただきました。そのためお政さんの留学準備はわずか3週間でしたが、このような立派なクリスチャン夫妻と同行できるのは大変恵まれたことでした。帰国後の新島氏が男子のために尽くしたのと同様に、お政さんも日本女性のために尽力してくれるだろうと願い、かつ信じています。彼女は自由になるお金を持参しますので、多少は信望を得るでしょう。

この手紙に彼女の写真と住所を同封いたします。モリス夫妻はクエーカー教徒⁷ですので、お政さんもクエーカー教徒の集会に通うことになるでしょうが、会衆派の人々が彼女のことを気にかけてくれるよう切に願います。フィラデルフィアには私の友人はおりませんし、そこには会衆派の教会はないと聞いております。出来ましたら、お政さんに手紙を書いて、あなたのご友人方に興味を持って貰えるように、勉強ぶりに関しても継続して知らせるように言って下さることを願います。モリス夫妻は彼女の世話を引き受けるには最適の人です。その上ご夫妻は責任を負うことを負担とは感じられない方と信じています。もしお政さんの写真がご入用でないなら——あなたのも

とにはこのようなものが一杯届くと思うので、無理もないのですが——その写真をバージニア州ハンプトンにいるアリス・ベーコン嬢⁸に送って下さっても結構です。あなたがその写真を入用でないとしても、私の気持ちは傷つきませんが、お政さんのことを気にかけて下さらないならば、私はひどく傷つきますよ。

彼女は留学を強く願っていましたので、願ってもない状況で、それが叶えられたことを大変嬉しく思います。この留学が悪よりも善をもたらすことを願っております。土倉家は半ば洋風の生活をしていますので、アメリカ人の贅沢ぶりを見ても影響されて駄目になることはないでしょう。というのは、一家は湯水のように金銭を使う王女のような贅沢な生活に慣れているからです。彼女には節約を学び、実行するようにとずっと言って来ました。モリス夫人も儉約を奨励して下さるはずですし、留学中にはあらゆる面でアメリカから学んで欲しいのです。彼女は最低5年間は留学する予定ですので、十分に落ちついて考えた上で、どの大学に行くかを定める筈です。モリス夫人はブリンマー大学⁹を推薦していますが、全ては将来のことです。

お話ししたい、もう一つの事柄は、給料のことです。今終えたばかりのミッションの会合で昇給の要求をすることが投票で決まりましたが、私は今から太平洋ウーマンズ・ボードに手紙を書いて、私の給料は従来通りでいいと頼もうと思います。銀本位制¹⁰に貨幣価値が変動しても、現在の給料のまままでやっていけると思いますし、昇給したとしても、それだけ能率よく仕事が出来るとは思いません。

数年前給料のことが初めて持ち上がった時は、給料の平準化だけが問題でした。どうして男性たちが女性よりも生活費を多く必要とするのかは不可解なことの一つです。仮にここに25人の未婚者がいて、そのうち3人が毎年1,000ドルはどうしても貰わねばならないと決めるとします。その時ボードは3人の言い分をそのまま受け入れるべきとお考えになるでしょうか？ 私650ドルがもらえるものなら、切り詰める必要から解放されるので、今よ

りずっといい仕事が出来るとでしょう。でもなぜミッションの、この3人だけが恵まれて、女性をあまり尊敬しない周囲の人たちに、これ見よがしの結論を引き出す機会を与えてしまうのかは、これまたミッションのリーダーの男性たちには答えられない問題です。あらゆる面で来日している独身男性たちは私たちよりも少ない額でやっていけます。彼らは賄い付きで暮らしていて客を接待しません。紳士服は少なくとも本国より25%安く入手できます。日本の仕立て屋はずっと安く、しかも「良い」仕事をします。婦人服に関しては、生地は本国より高く、しかも有能なドレスメーカーはいません。だから高級なドレスは本国から取り寄せねばなりません。日本人は貧弱な服装を大目に見てくれませんかから、私たちは上等なドレスを持っていなければならないのです。また服装一式をそろえるための細々したのものも、本国から取り寄せなければならないのです。

こんなことを言った人がいました。「女性よりも男性の方が本を必要とする」と。あまりにも馬鹿げていて反論する気にもなりません。一つ大変矛盾していることは、信仰上の問題について「前進」「旧弊思想」「頑固さ」等が絶えず問題になっていますが、他方、公平さから見ると、まさにこのように訴えている男性の間に、ひどい時代遅れがみられます。家族持ちについても例を上げれば、少なくとも5家族は1,200ドルを必要としていると私は確信しています。1,200ドルを必要とする人たちには当然与えるべきです。でも650ドル必要だと言っている2, 3人には650ドル、残りの人たちには550ドルとは、一体どういうことなのでしょう。仮にある家族だけに別の家族よりも多く渡そうと申し出る人がいたら、大騒ぎになることでしょう。東京での家族¹¹の事例に関しても、様々な意見が出ました。ミッションの中でお金が「一番かかる」家族が、「一番お金のかかる」地域に住んでいると、他の人たちと同じ額のサラリーではやっていけないことは自明であるにもかかわらず、です。

どうぞここまで記したことをお許し下さい。これで最後にします。

敬具

M. F. デントン

1. 土倉政（子）（1871-1946） 土倉庄三郎の次女。1889年女学校を卒業後は京都看病婦学校で一年間教師を勤め、1890年に私費で渡米。同志社女学校卒業生初のアメリカ留学生としてフィラデルフィアの語学学校及びプリンマー女子大学で学び、BA を取得した。帰国後、外交官の内田康哉（のち外務大臣、伯爵）と結婚し、国内外で活躍した。
2. 中島力造（1858-1918） 京都府下福知山町で誕生。第一回の入学生として1875年に同志社英学校に入学。1878年中退して津田仙の学農社教師に就任。1880年渡米。1888年イエール大学の講師となる。その後英独両国に学び、1890年に帰国。1892年文科大学教授に就任し、倫理学を担当。以降死去するまで東京大学教授を勤め、倫理学を学問として確立するために貢献した。
3. 土倉庄三郎（1840-1917） 奈良県の山林地主。自由民権運動の支持者。同志社創立以来の新島襄の支援者で、大学設立に対しても強力な支援をする。娘三人（政、小糸、大糸）は同志社女学校の卒業生。
4. 新島氏 前出〈C-5〉
5. “Go ye into the world, and preach the gospel to every creature.” (AV) 「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコによる福音書16章15節)の引喩。
6. Wister Morris (生没年不明) と妻 Mary H Morris (1836-1924) フィラデルフィアの有名な親日家。モリス鉄道会社社長。夫妻とも篤実なクエーカー教徒(フレンド派)で内村鑑三、新渡戸稲造をはじめ何人もの日本人留学生の世話をした。夫妻は1890年に訪日し、帰国する際に留学生として同伴したのが土倉政である。夫人は、モリス氏没後の遺産を使って、津田梅子奨学金制度を設立したり、女子英学塾の創立を援助した。
7. クエーカー教 プロテスタントの一派、フレンド派 Society of Friends の別名。神の言葉に震えるとうわさされたことに由来。1650年頃 G. フォックスがイギリスで創始。人間の内なる神の光を信じて個人を尊重し、個人の霊的体験を重視する信仰。アメリカへは1657年ごろ伝えられ、W. ペンが自由と民主主義政治を実現したペンシルベニア州フィラデルフィアは1682年クエーカーの都市として成立した。日本への伝道は1885年頃に始まり、87年に普連士女学校を東京芝に設立。
8. Bacon, Alice Mabel (1858-1918) 米国コネティカット州ニューヘーヴン在の親日家の牧師の末娘として生れる。一家は1872年、日本からの使節団の一人山川捨松のホストファミリーとなる。ハーバード大学卒業後、ハンプトン師範学校長。

1884年、山川捨松や津田梅子の招聘により華族女学校（後に学習院女学校）英語教師として来日。1900年には再来日して、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）と女子英学塾（現津田塾大学）の英語教師を勤める。

9. Bryn Mawr College アメリカ合衆国ペンシルベニア州にある私立の名門女子大学。1885年熱心なクエーカー教徒が創立したクエーカーの大学。セブン・シスターズ（アメリカ東部にある名門女子大学7校）の一つで、リベラル・アーツ・カレッジである。津田梅子奨学金の留学生（初代受給者で、同志社女学校校長の松田道もその一人）は、ほとんどこの大学を卒業している。
10. 銀本位制（silver standard） 一国の貨幣制度の根幹をなす基準を銀と定め、その基礎となる貨幣。アメリカでは19世紀末に植民地を支配するに当たり、銀本位制を破棄して余った銀貨を植民地に押し付け、自国では金を替本位制を導入した。
11. グリーン宣教師（Daniel Crosby Greene 1843-1913）一家のこと。1869年最初のアメリカーン・ボード宣教師として夫妻で来日。当時「関東地方の伝道は長老派と改革派が担当、関西地方の伝道は会衆派が受け持つ」という取り決めて、神戸に日本ミッシヨンの拠点を定めた。その後、1874年横浜に転じ新約聖書の翻訳に参加、この時期は東京在。

〈クラーク書簡 C-8〉 【松波満枝 訳】

（Denton 書簡【140】への Clark の返信）

マサチューセッツ州ボストン

1890年8月26日

拝啓 デントン様

今日お手紙を書いた第1の理由は、あなた宛に看護婦1名のために、カリフォルニア州パサデナの会衆派教会に属するグループから、6.25ドルの送金があったことを報告するためです。

まだほかにもお手紙を書くのに十分な理由があります。それは、最近フィラデルフィアに来られた若い日本人女性〔土倉政〕について、あなたが書いて下さった、機転に富み、明るい見通しのお手紙を2～3日前に受け取ったことをお知らせするためです。

大層興味深いお話だと思いました。明らかに類い稀な能力と資質を備えた

女生徒のために、こんなにも雄弁に支持を述べてくださったことに異論を唱えるつもりはありません。一緒にいただいた写真は、居間のマントルピースの上に飾ってみなで愛でています。もし、当のお嬢さんに何かして差し上げることがあれば喜んでお手伝いいたしましょう。それほどまでに並外れて興味深い愛弟子をお持ちのあなたにお慶びを申し上げねばなりませんね。そのことがあなたを彼女の家族〔土倉家〕に紹介することになり、結束を固めるきっかけとなればと願います。そうすればあなたにとっても、ご家族にとってもいろんな意味で役に立つでしょう。

もっと手紙を続けたいのはやまやまなのですが、今は仕事のために時間がありません。伝道の分野でのご成功に心からのお祝いを申し上げます。

敬具

N. G. クラーク

〈クラーク書簡 C-9〉 【柿本真代 訳】

日本 京都

1890年11月29日

拝啓 デントン様

あなたの愉快なお手紙を読ませていただいてから、ずいぶん経ちました。お手紙はとっても楽しいので、次便を首を長くして待っております。

カリフォルニアのご婦人たちも、あなたを日本へ派遣してよかったと、大変満足されているのではないのでしょうか。彼女らがそう思われるのも当然と言えます。今の所、あなたが男子生徒を教えることに対する不満¹は聞いておりません。太平洋ウーマンズ・ボードの方々にはこういった問題にはいくぶん厳しいですが、近ごろは何も聞いておりませんし、あなたにとって一番望ましいやり方で働けるよう道が開かれていると信じています。

あなたがどうしておられるか、あなたの下で伝道はどのように進捗しているかなど、数行でもいいので教えていただけると嬉しいのですが。今年度が

始まってから京都の学校の様子についてはほとんど伺っておりませんので。

他の女性方にもよろしくお伝えください。皆様に良いことがありますように。

敬具

N. G. クラーク

1. ウーマンズ・ボード派遣の女性宣教師の役割は「外国の女性のキリスト教化」と定められていた。

〈デントン書簡 141〉 【松波満枝 訳】

日本 京都 同志社女学校

1891年2月21日

拝啓 クラーク博士

昨年11月29日付けのお手紙に感謝を申し上げますと共に、今からあなた様のお心を痛める手紙をお送りすることをお許してください。お知らせしたいことは、ホワイト校長¹の病気の真相についてだけなのです。本当にそれは恐ろしい経験でございました。

今、彼女の生命があるのは——神ならぬ人間の立場から申し上げますと——確かにバックレー医師²のお陰です。私たちがこれまでどれだけお医者様に頼っているかに初めて気づかされましたが、今回バックレー医師は実に素晴らしい腕前を発揮して下さいました。ホワイト校長は元々肺がお弱く、胃にも問題があったのですが、今回は非常に不利な状況の下で、この病気にかかってしまわれました。様々な症状の伴うインフルエンザです。症状はどれもこれも、みなぞっとするものばかりでした。校長は普段からひどいひきつけやさしこみの発作に度々襲われていましたが、この病気の間中、それが頻繁に起こりました。病気になって2～3日間は、きっと腸チフス性の肺炎や腹膜炎に進むのを人間の力では到底抑えることは出来ないだろうと私は思っ

ていましたが、医師の絶え間ない治療と決断力、医学上の知識のお陰で、そこまでは行かずに済みました。ホワイト校長には症状が露わになるタイプのヒステリーがありました。そのこと自体は前からのことなのですが、——校長はこのことについて、とても敏感になっておられますので、彼女への手紙では触れないようお願いいたします——それに伴って起こる、医師が「筋肉性収縮の強硬症」³と呼ぶ恐ろしい発作のことは、とても言葉で説明出来ません。発作が起こると、彼女の腕がねじれたり、指がひん曲がったり、掌が裏返ったりするのをウェインライトさん⁴と私では防ぐことは出来ませんでした。部屋が揺れる程のひきつけが起こった恐ろしい夜も何度かありましたが、もっとひどい時には医師の断固たる処置だけが、首や顎が同じ症状を起こすのを防いでくれました。

バックレー医師の技術と情愛をいくら褒めても褒めすぎることはありません。彼女は昼も夜も四六時中側にいるか、すぐに駆けつけてくれました。バックレー医師は、何を、いつ、どのようにすべきかを熟知していました。ウェインライトさんは、その中でも一番面倒な部分を引き受けてくれました。家事を担当して下さっており、いつも完璧な家政婦です。ホワイト校長は元気な時でさえ食欲にはむらがあり、喜んで食べてもらうのは難しかったのですが、ウェインライトさんはいつも優しく、生まれつきの忍耐そのもので接して下さいました。私が出会った女性の中でも、一番他人思いで控えめな人です。女生徒にとっても私にとっても、いつも生きた信徒の手本でした。また、女生徒たちは大きな慰めでした——看病の手伝いをしたり、ひたすら祈り、とても穏やかで、我慢強くしていてくれました——すばらしい生徒に恵まれました。彼女たちはとても信頼できる働きをしてくれ、聡明で、熱心で、信仰深いので、私自身の弱さを思うと恥ずかしくなります。この病気に纏わる全てを通して、クリスチャンとしてこれまで経験したことの無い神の助けをずっと感じておりました。以前にもまして京都ステーションの宣教師の方々のことを知り、愛するようにもなりました。みんながみんな私たち

にととても親切にしてくださいました。ホワイト校長が寝付いてから次の火曜で6週間になりますが、まだ床上げが出来る状態ではありません。今週は2～3回、1～2時間だけ、大きな椅子に座れるようになりました。どうか校長宛に愛情を込めたお見舞い状を書いてくださるようお願いいたします。彼女は大変苦しんだのですから。あなた様には何の興味も無いかもしれませんが、この長い手紙を大目にみて下さいますようお願いいたします。

敬具

フローラ・デントン

1. ホワイト 前出 (C-5)
2. Buckley, Sarah Craig (1858-?) 中部ウーマンズ・ボードの医療宣教師。医学博士。ミシガン大学で医学を学び、同志社病院と京都看病婦学校で働くために来日。看病婦学校では医学を教えた。夫 E. バックレーはシカゴ大学で学位を取り、同志社で哲学と心理学を教えた。夫妻の同志社在任は1886-92年。
3. 強硬症 受動的に与えられた姿勢を長時間保持するもので、統合失調症やヒステリーなどでみられる。
4. ウェインライト 前出 (C-5)

〈クラーク書簡 C-10〉 【秋山恭子 訳】

(Denton 書簡 【141】 への Clark の返信)

日本 京都

1891年3月17日

拝啓 デントン様

2月21日付のお手紙を今朝受け取りました。全文を読み終えて咄嗟に「何ていい人！」と声を上げました。「ウェインライトさん¹やホワイト校長²のことをこんなに愛情を込めて寛大に書いているデントンさんは何という素晴らしい人なのだろう」と。二人のことと、バックレー医師³を思いやりを持って書いて下さったことに心から感謝します。私は、このような緊急事態に遭遇して初めて明るみになるような性格や精神の内面こそを知りたいので

す。そして以後あなたたちの関係は、この経験を通して前よりも思いやりのあるものとなり、ますます寛大で情愛の深いものになるだろうと思わざるを得ません。ウェインライトさんについて述べて下さっている事柄が特に嬉しかったです。彼女には試練となる問題があるのは知っていましたし、出来る限り救済してあげようと努めていたのですが、今はウェインライトさんと皆さんの関係はうまく行っているのだと思います。あなたがこれ程までに彼女のことを思いやり、同情した手紙を書いて下さり、彼女はホワイト校長のために献身的な看護をして下さったのですから、愛情ある敬意はこれから先も絶えることなく続くでしょう。しかし、校長自身こそ、こんな深刻な病気を経験されたのですから、とてもお気の毒に思います。

ホワイト校長が病気であることは別の方面からの手紙で、折々に触れられていたため知っておりましたが、今回初めて詳しくご報告頂きました。この特別な苦悩を経験された皆さまに心から同情せざるを得ません。しかしながら、女生徒たちが大変思いやりがあり、感謝の気持ちで一杯だと知って嬉しいです。ささいな経験であっても、生徒にとって恵みとなる経験だったに違いありません。ホワイト校長が再び彼女たちの前に姿を現したときには、新たな関心と愛情で敬愛する教師をお迎えすることでしょう。校長自身は休息と転地療養のため帰国を強いられるかもしれないと感じていると聞いていますが、その必要がなければいいと願います。しかし、バックレー医師やベリー医師⁴がきっとホワイト校長に適切な助言をしてくれるだろうと確信しています。

手紙の中で包み隠さずに書いて欲しいという私の願いに配慮してくれたことに対して、もう一度お礼を申し上げます。今回の手紙は、少し前に受けとった、あの特別にうれしかった手紙（書簡番号 [140]）とは全く内容が違っていました。この2通の手紙だけでデントンさんの知的で道徳的なイメージを私の心に作りあげるのに役立ちましたし、これからも大いに高く評価することでしょう。この悲しくて痛ましいホワイト校長の病気のために、

現在は校務が滞り苦難と感じられても、女学校にとって恵みの手段になることをただただ希望いたします。

敬具

N. G. クラーク

1. ウェインライト 前出〈C-5〉
2. ホワイト校長 前出〈C-5〉
3. バックレー医師 前出〈141〉
4. Berry, John Cutting (1847-1936) アメリカン・ボード宣教師として1872年来日。先ず神戸に5年弱在任し、一時帰国して1879年に再来日してからは岡山で5年余、医療・伝道活動を行った。次は京都で新島襄と共に医学校設立を計画し、アメリカで募金活動のために帰国するが、日本ミッションの決断は看護学校設置であったので、計画を断念。代りに同志社病院と京都看病婦学校を拠点とした医療・看護活動に従事しつつ伝道にも携わった。

〈デントン書簡142〉【小林弘美 訳】

日本 京都

1891年6月17日

拝啓 クラーク博士

悲しみの中におられるあなた様に一言のお見舞いを申し上げることもなく、ご無沙汰してしまったことを申し訳なく思っています。ちょうどそのような時に私たちにお手紙をくださるとは、どれ程の勇気と親切心を兼ね備えたお方なのでしょう。こちらでは、あなた様のご不自由¹についてよく話していますが、出来事全てに神の御手を感じて下さるようにと絶えずお祈りしています。

私たちの気持ちは、今一緒に居るハーヴェー夫人²に向いております。彼女は22歳の若さで来日され、長老派ボードに属し、1年後に、神戸在住の若い実業家——自称クリスチャン——と結婚されました。10ヵ月後、彼は1万ドルを超える額の債務不履行者として姿をくらまし、彼女はひとり残されま

した。彼が去ってから、正妻がアメリカに居ることが分かりました。妻を数年前に見捨てていたのです。ハーヴェーさんは秋以来、ほとんどの時間私共と共に過ごしておられましたが、5月23日に出産、しかし赤ん坊は5月26日に亡くなりました。全てのことが私たちには辛い試練となりました。

ホワイト校長³の長期に亘る病気も重い負担となっています。今もまた病床に臥してもう2日になりますが、すぐに快くなる兆候はありません。熊本のクラーク宣教師⁴もまたバックレー医師⁵の介護を受けながら一緒に過ごしています。クラークさんは誠に立派な女性らしさを備えた私の理想の方で、病弱にもかかわらず、数え切れないほどのやり方で手助けしてくださり、私たちにとって最高の天の恵みとなっています。女学校は多少痛手を被っていますが、一同出来る限りのことをしています。そして日本人教師や女生徒たちはみな気持ちよく過ごしています。女生徒たちには本物の信仰の目覚めがみられます。そのことについては、休暇中に詳しくご報告するつもりです。

ホワイト校長の身になって優しいお手紙を書いてあげてください。

敬具

F. デントン

1. クラークは1885年視神経の病気で片方の目の視力を失い、数年後もう片方も病魔に襲われる。(MEMORIAL OF THE REV. NATHANIEL G. CLARK から)
2. Mrs. Harvey 詳細不明
3. ホワイト校長 前出〈C-5〉
4. クラーク宣教師 前出〈446〉
5. バックレー医師 前出〈141〉